





































名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考	
住の用具												
長井亜弓												
火床の用具												
 いろり 囲炉裏	火床（火を焚く場所）の一種で、屋内の床や土間を四角く仕切って作った設備を指す。煮炊きや暖房に使う。台所の土間寄りにあることが多く、囲炉裏の火を絶やさずに保つことが、主婦の重要な役割とされた。	ユルイ		ユルリ	ユルイ、ユルリ、イルリ	ユルエ、ユルイ、イルビ	イロリ、ユルリ	ユルイ、ジロ	ジール	【囲炉裏】いじろ・いなか・えなか・いれぼた・いれぶち・いんなか・えぬぎ・えれんなか・えろぶち・よぶち・えんなか・えんなた・おくど・おくら・おまえくど・かなご・かなみ・かまど・きじり・きりくど・くど・しびつ・しびと・しふと・しふど・しほと・しる・しろ・しろー・しろぎ・しりり・すびと・すぶと・ちろ・ちろり・どんど・ひーたきば・ひーたくぼ・ひじろ・ひたきじろ・ひつっー・ひつぼ・ひごこ・ひなか・ひなた・ひのなか・ひびと・ひぶど・ひほど・ひむしば・ひんなか・ふげんさま・ふんごみ・ふんごみろ・へなか・へんか・へんなか・ほいろ・ほど・ほろ・まっこ・まっこー・よろばた・よろぶち・よろぶつ・よろびつ・ろえん・ろぶち 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【伊】いれし・いんなか・えぬぎ・えれんなか・えんなか・おくら・おまえくど・かなご・かまど・くど・げろ（山言葉）・ししり・しじろ・しびつ・しびと・しふと・しろ・すびつ・すびと・ひじろ・ひつっー・ひなた・ひぶど・ほど・まっこ・ゆるぎ・ゆるぎ・ゆるり・ろえん・ひじろ・ほいろ・まっこぎ・ゆるり・ゆるり以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 じざいかぎ 自在鉤	鍋類を吊るす鉤の一種。高さが自由に調節できる。	ジザイカギ、カギザオ、カギナカギ	オカマサマ	ジザイカギ、ツツカギ	ジザイカギ	ジザイガギ	ステカツ	カキス、カキジャー		【自在鉤】おあんさま・おかま・おかまさま・かぎ・かぎさま・かきじょー・かぎだけ・かぎつけ・かぎつるし・かぎどの・かぎのはな・かぎんさま・かげすな（鍋製）・かたり・じろかぎ・つるし・こざるかぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 そらかぎ 空鉤	自在鉤を吊る鉤。梁から下げる。 エビス、ダイコク などの種類がある。									【自在鉤を下げる鉤形】そらかぎ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 かまど 竈	火床（火を焚く場所）の一種で、煮炊きに使う装置。火床を土、石、煉瓦などで囲み、上に鍋、釜、網などを載せる。 東日本の農山村では囲炉裏で煮炊きを行う地域が多く、竈を用いるようになったのは比較的近年のことである。 一般に、家庭の火床には竈神が祀られ、オクドサンなどと呼ばれた。 円陣クド、西洋竈 など、竈口の数や作り方はさまざま。	カマド	カマド	カマド、クド、フド、ハツツイ、ド、ベツツイ	カマド、クド、カマド、オカマド、ハツツイ、カマド、カマド					【竈】いえなか・いなか・いろり・えんなか・おーがま・おかまさま・おかまさん・おかまはん・おくこ・おくど・おくどはん・おくどさん・おくどはん・おこーじんさま・おとごはん・おふろ・かきどこ・かざりくど・かまいさん・かまえさん・かまくち・かまくど・かまくどはん・かまくろ・かまさん・かまはん・かまだん・かまち・かまつくど・かまごこ・かまごこ・かまごこい・かまごこまえ・かままえ・かまのたん・かまぼ・かまぼこ・かまや・かまんくち・かまんで・かまんひた・かまんぼ・かまんぼー・きりくど・くす・くすし・くすがま・くど・くどくど・くどー・くどがま・くどこ・くどさん・くどし・くどごこ・くどぼ・くどまい・くろ・くんど・こーじんさん・こど・こり・さんぼーさん・さんぼーはん・しもくど・じろ・すいがま・すぼたん・ちゃね・ちゃーねん・つちくど・どーこにわくど・ぬがべつつい・はま・ひじろ・ひぞこ・ひとこ・ひとこ・ひのぼと・ふど・ふる・ふるど・ふんし・へつすい・へつすいさん・へとこ・へとこ・ほど・ゆるり・ゆるり・ゆるりばた・ゆるり・よろり・ろくだい 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【竈】いなか・おかまさま・おくどさん・かま・かまくど・かまだん・かまのくち・かまぼ・かまぼと・かまや・くす・くすし・くど・くどがま・くどこ・くどぼ・くどまい・くろ・しもくど・じろ・すぼたん・ひとこ・ひのぼと・ふど・ふる・ゆるり・ゆるりばた・かまだん・さんぼーさん・ひとこ・ふるどこ・へとこ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 ひふきだけ 火吹き竹	火種に空気を送り、火勢を増すための道具。適当な長さの1本の竹を片方の節だけ残して切り、底に小さな穴をあけたもの。火種に燃料を添え、小穴のほうを向けて息を吹きつけて火をおこす。	ヒフキタケ		ヒフキタケ	ヒフキタケ	ヒフキタケ		ヒオコシ	ヒーフチ	【火吹竹】くすいたけ・ふきつぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 うちわ 団扇	あおいで風を起し、火力の調節にも使われた。細く削った竹の骨に紙または布などを貼ったもので、台所では柿渋を塗った団扇が重宝された。	ウチワ			ウチワ			ウツバ	オージ	【団扇】あうち・あおち・あぶち・うっぱ・おーじ・おーに・おちゃ・おちや 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【団扇】あうち・あおち・あぶち・たいせん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）		
 ひばさみ 火挟	炭などの固形燃料や燵など、火の周辺のものをつかんで移動させる道具。 二本の細い鉄棒から成る箸状のものや、ピンセット状になったものもある。	ヒバシ			ヒバシ、カヒバシ	ヒバシ		ヒバシ	ヒバシ	【火箸】いらくれ・いらくら・でっち・ひーばさん・ひばーさん・ひばさみ・ひばさん・ひやっさん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）		
 ひかき 火掻き	火の中から燵や燃えさしを掻き出したり、移動させたりして火力を調節するための道具。 先端が鉤状になった棒など。				ヒカキボウ				x			














※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください












名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 じゅうのう 十能	炭火や灰を運ぶ容器。長い柄のついたスコップ状のものは、囲炉裏や竈の灰や燵（おき）を掻き出したり、そのまま運んだり多目的に用いられることから「十能」と呼ばれた。 ヒカキ、スキカキともいう。下部に台のついた「台十能」もある。	ジュウノウ			ジュウノウ	センバ(古)ジュウノウ 称)ジュウノウ ノ	ジュウノウ	ヒスクイ	x	【十能】おきどり・おきかき・おきすき・おきすけ・おきすくい・おきどり・おきすくい・おっかき・おっかけ・かまさらいきな・かんじゃ・かんじゃく・すかき・すく・せんば・せんば・せんばん・せんべ・せんぼ・ちーとういきな・ひーしチャー・びーしゅくいぬぬ・びーすくい・びーすくやー・びーすくいぬぬ・ひいれ・ひかき・ひすき・ひすく・ひすくい・ひすつ・ひっかき・ひとり・ひやすくい・ふいーしチャー・へすき・へすく 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【十能】おきかき・おきすくい・おっかき・かんじゃ・かんじゃく・さっけー・さん・すくり・せんば・せんばん・ひかき・ひすくい・まつすくり・しやな 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ひけしつぼ 火消し壺	燃えさしの消火に使う蓋付きの密閉容器。単に消壺ともいう。薪や炭の燃えかけの赤い部分を火箸で挟み出し、壺に入れる。できた消し炭は火移りがいいので、炭火をおこすときなどに用いる。	ヒケシツボ			ケシツボ	ケシツボ	ケシツボ	ケシツボ	x	【火消壺】けしがめ・けしごがめ・かしぼち・ほーろく・からけしつぼ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ごとく 五徳	鉄輪の一種。鍋釜台。円形の鉄の輪に3本の脚がつく。	ゴトク			ゴトク	カナゴ、カナフ、カナオ	ゴトク、カミフ、ミツアシ	ゴトク		【五徳】うわおき・おこじんさん・かなおさん・かなごさん・かなご・かなごさん・かなでさん・かなごさん・かなわ・かののー・こーじん・こーじんさん・さんそく・さんとく・さんどく・さんとこ・さんぼあし・さんぼーこーじん・さんぼーさん・さんぼんあし 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【五徳】かなぐ・かなご・かなわ・かのー・さんそく・さんとく・さんぼんあし・びんかけ 【鍋などをかける三脚】ごどく・さんきゃく・さぎつちよ・さんぎつちよ・さんぼんあし 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 わたしがね 渡金	鉄輪の一種。上部が格子や網状で、餅や魚などを焼くのに使う。鉄器、焼台、渡網などともいう。	ワタン			テツキ	テツキ			x	【てつきゅう・鉄架・編】あぶこ・あみわたし・ごとく・てき・てつき・わたしがね 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
暖房具											
 ひばち 火鉢	中に炭火を入れ、手足を暖めたりするのに用いる暖房具。 古くは火桶・火櫃といい、単に「火鉢」というときは、陶器製の丸形のを指す場合が多い。湯を沸かしたり、食べものを焙ったりすることもある。 丸火鉢、箱火鉢、角火鉢、長火鉢、手あぶりなどの種類がある。	ヒバチ			ヒバチ	ヒバチ	ヒバチ	ヒバチ	ヒバチ	【火鉢】おかふる・ひいれ・ひいれぼち以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【火鉢】ちやわんひばち（瀬戸物）・ひばこ・びんかけ（唐金） 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 まるひばち 丸火鉢	火鉢の一種で、陶器製丸形。単に「火鉢」というときは、これを指す場合が多い。							ヒバツ			
 はこひばち 箱火鉢	火鉢の一種で、板作りされた方形なものを指す。 「角火鉢」ともいう。大きさは九寸ないし一尺、高さ一尺内外が普通とされる。	ハコヒバチ			ハコヒバチ		ハコヒバチ	ハコヒバツ	ヒバチ		
 ながひばち 長火鉢	火鉢の一種で、長方形の箱型。一般に、長さ二尺、幅一尺二寸、高さ一尺一寸程度の大きさで、引き出しがついたものもある。				ナガヒバチ		ナガヒバチ	ナガヒバツ		【長火鉢】おかる・おきる・じょたん・だいす・ながる・はこひばち・ふしよぶる・やまとぶる 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 てあぶり 手炙	火鉢の一種で、持ち運びやすい小形なもの。寄り合いや人寄せの際に、各人または数人に一つの割で前に置き、暖をとる。				テアプリ					【手あぶりの小さい火鉢】しゅーろ・ふいーるー 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【手炙】しゅーろ・ひいれぼち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 はいならし 灰均し	炭火や燵に灰をかけたたり、灰を均したりするための籠。 薄いブリキ製が多い。				ハイベラ				x	【灰ならし】あくせんば・いけべら・かなべら 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ひばし 火箸	炭などの固形燃料や燵など、火の周辺のを挟んで移動させる道具。 主に二本の細い鉄棒から成る箸状のものが使われる。	ヒバシ			ヒバシ	ヒバシ、カニヒバシ	ヒバシ	ヒバシ	ヒバシ	【火箸】いらくれ・いらくら・でっち・びーばさん・ひばーさん・ひばさみ・ひばさん・ひやっさん 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 すみ入れ 炭入れ	日常使う分の炭を一時的に入れておく容器。 炭俵から日々使う分を小出しに移して使った。形状は籠や箱などさまざま。	スマバコ、スマイレ					スマトリ、スマイレ				
 あんか 行火	手足をあたためるために用いる移動用の火爐。 炭火を入れた容器が小形の覆いに仕込まれており、持ち運びできる。ねこ、猫火鉢ともいう。	アンカ、ヒバコ			オコタ、コタツ	バンドコ、パンコ	コタツ、ヒバコ、パンドコ	アンカ	x	【行火】おかごたつ・つじぼん・つちぼん・つみぼん・ねこ・ねこひばち・ぼんこ・ぼんしよ・ぼんた・ぼんご・ぼんごこ・ぼんごこ・ぼんごころ・ひばこ・ぼんせ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【炬燵・置炬燵・行火】おほこ・つじぼん・つちぼん・どんご・ぼんご・ぼんしよ・ぼんた・ぼんごこ・ぼんや・ぼんせ・ぼんごたつ・おかごたつ・しおけ・ぼんごこ・ふいーるー 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ひいれ 火入れ	中に炭火を入れる容器。 こたつや行火の熱源に用いる。								x		

住














名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 みずや 水屋	台食器や調理具、食物などをしまう可動の 台所用収納具。 水屋箒筥、食器棚・食器戸棚ともいう。	ミンジャ			ミスヤ		ミスヤ、シ ヨッキダナ		シヨッキダ ナ	【戸棚】 ごと・さんがい・じゅーだな・じ よーだな・じよだな・しんぼろ・すし たなもと・たのまえ・たのもと・ふだな ふつたな・ふるだな・ふる・ふんだな ほーろ・ほら・ほろ 【食器や食物など を入れておく戸棚】 ふだな・ふるだな ふる・ふる・ふるだな・ふんだな 【食 器類を入れておく戸棚】 さんがい・せん たな・でんたら・ひきど・みずや・みっ じゃ 以上、『標準語引き方言辞典』（佐 藤亮一） 【戸棚】 おしこみ・おしろい・ごと・こみ しんぼろ・どーご・ねずみくら・ひつ ふだな・ふつたな・ふる・ほろ・おしこ み・ちよーでい 【食器棚】 ふるだな はいらす・ふいついき 以上、『標準語引 分類方言辞典』（東條操編）	
 たんす 箒筥	扉や引き戸、戸棚や引出しのついた収納箱。 衣裳箒筥、茶箒筥、帳場箒筥、薬箒筥、船 箒筥、階段箒筥など、さまざまな種類がある。	タンス			タンス		タンス	タンス	タンス	【箒筥】 たんじ 【衣類箒筥】 きんびつ・ きんべつ 【引出し四つもの二個の上 に上置き一個が組み合わさった箒筥】 み つよせ・みつよせ 以上、『標準語引き 方言辞典』（佐藤亮一） 【箒筥】 きんびつ 以上、『標準語引分類 方言辞典』（東條操編）	
 ちゃだんす 茶箒筥	居間に置き、湯茶や菓子、小間物などを収納する戸棚、箒筥。 茶道具を置くための茶棚から発達。違棚・ 袋戸棚・抽斗などを適宜組み合わせたつくり。				チャダンス				タンス	【茶箒筥】 ちゃぼんこ・ちゃぼんとごな (ちゃぼんこ)・たいす・たいす 以上、 『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ほんばこ 本箱	西洋式製本の書物を納める専用の戸棚。 書棚ともいい、扉やガラス窓をつけたもの もある。			ホンバコ	ホンバコ					【本箱】 しゅむついばく・しょもつばこ たじ・ぶんこぼこ・ぶんこぼこ・ほんこ ぼんだじ 以上、『標準語引き方言辞典』 (佐藤亮一) 【本箱】 ほんたじ 以上、『標準語引分類 方言辞典』（東條操編）	
 けんとんばこ 俵饨箱	特殊な蓋のついた収納箱。俵食箱とも書く。 正面の出し入れ口には、上下もしくは左右 に溝がきいてあり、俵食蓋と呼ばれる蓋を はめこむ構造。開口時は上にスライドさせ て引き抜くか、溝から持ち上げて外す。も ととは一杯を盛り切りで供した俵食うどん や俵食そばの出前箱だったが、和綴じ本 などさまざまなものの収納にも使われる。										
 ひつ 櫃	衣類や装身具、その他調度品を入れる蓋付き の収納箱。運搬具も兼ねる。 大陸から伝わった四脚・六脚のものを「唐 櫃」といい、後に脚をつけない「和櫃」も 作られた。								ケー	【櫃】 きち・きつ・きっち・きつ 以上、 『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ながもち 長持	衣類や布団、調度品を入れる蓋付きの収納 箱。運搬具も兼ねる。 長方形の蓋つきの箱で、棹を通して二人で かついで運ぶ。 絹櫃、車長持 など。	ナガモチ キンビツ			ナガモチ	ナガモチ ハンナガモチ チ、フンコ バコ	ナガモチ ナガモチ	ナガモチ カンビツ	ヒチ、ケー	【衣類箒筥】 きんびつ・きんべつ 以上、 『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【長持】 いっけんびつ・かい・ひ 【車長 持】 からと 以上、『標準語引分類方言 辞典』（東條操編）	
 つつら 葛籠	衣服などの収納に用いる蓋付きの収納箱。 運搬具も兼ねる。 形は長方形で、藤蔓や竹・松の剝片を編ん だ籠に漆・漆などを塗った。負い紐の付い ているものもある。	ツツラ					ツツラ	ツツラカゴ	x		
 こうり 行李	入れ子になるふたがついた物入れ。 多くは竹や柳で編まれ、柳の皮でつくった ものを柳行李、竹製のものを竹行李という。 小さいものは弁当箱、大きなものは衣裳箱 などに使用。旅行時または日常衣類の整理 収納に用いた。 竹行李・柳行李 など。	コウリ、ヤ ナギコウリ			コオリ	コオリ、ヤ ナギコオリ	コウリ	ヤナギコイ	x	【行李】 かんご・くりばく・くりぶく 以上、 『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 えもんかけ 衣紋掛	衣服を掛けたり吊るしたりする道具。現在の ハンガーに対応。 江戸時代から用いられた服かけの一種で、 衣紋竹、衣紋棹とも称する。1 m弱の細い棒 の真ん中を紐で吊り、着物の袖を通してか ける。				エモンカケ			エモンカケ		【衣架】 かけざお・かけざわ・きもんざ お・せぞ・ならし・みせざお・みせかけ みせぞ 以上、『標準語引分類方言辞典』 (東條操編)	
 いこう 衣桁	衣類を掛けたり吊るしたりする道具。衣架 (いか)・御衣掛(みそかけ)ともいう。鳥 居形と屏風形がある。				エコウ				x		
 さお 棹	天井から腕木を吊るし、一本ないし二本の 棹を渡したものだ。				モノホシ						
 かけじく 掛け軸	書画を軸物に表装し、壁などに掛けて飾り とし、または観賞するもの。									【掛物・掛軸】 えさん・かけさん・とこえ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操 編）	
 つくえ 机	読書をしたり、物を書いたりするための脚 付きの作業台。 書見台、文机、二月堂 などの種類がある。				ツクエ	ツクエ	ツクエ	スク(シュ ク)		【机】 いば・いばん・えば・ごき・しくだ い・しこーく・しゅく・しゅくだい・し ゅくで・しゅくでー・しよ・しよーく・ しよき・しよく・しよくだい・しよくえ しよくけー・しよくだい・しよーく・すく すくー・すくだい・すくだい・すくで すくでー・せく・ばん・ばんなか・ぶん こ・ほんこ 以上、『標準語引き方言辞 典』（佐藤亮一） 【机】 えば・ごき・しゅく・しゅくだい しよく・せくで・ばん・ぶんこ 以上、 『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	

住

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 ひじかけ 肘掛け	座ったときに肘を掛け、からだをもたせかけて休息するために使う道具。脇息ともいう。						キョウソク		x		
 ふみだい 踏み台	手が届かないときなど、上に乗って高さを補うために使う台。 西日本では足継(あしつぎ)というところが多い。	フミダイ			フミダイ	フミダイ、 アシフミ、 ウマ		フソツ	アシンマ	【踏台】 あしあげ・あしつき・あしつぎ・あしらげ・あししゃげ・あつぎ・いっきやく・うーま・うま・うまだい・きんま・くだみ・くらいかけ・くらかけ・けたつうま・けたつんま・げつば・せつぎ・せつぎ・だいがら・だいはこ・たかあし・たけずき・たけつき・だんばこ・はこつうま・ひみつぎ・ふまいつき・ふまえ・ふまえつき・ふまえつき・ふまえど・ふんまえど・ふみあがり・ふみあげ・ふみいた・ふみうま・ふみずき・ふみずげあ・ふみだん・ふみつい・ふみつぎ・ふみやつき・ふんずき・ふんだぎ・ふんだん・ふんばい・ふんばり・ふんまえ・ふんみやがり・ふんめあつき(脚立)・まくらばこ・まこ・まっこ・やしよんま・やせうま 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【踏台】 あしつき・うま・きやつ・けたつ・しんご・せつぎ・せつぎ・たかあし・はこつうま・ふまいしょーぎ・ふまいつき・ふみあがり・ふみあげ・ふみつぎ・あしあげ・けつば・ふまえつき・ふんだぎ・やせうま 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 はしご 梯子	昇降のための道具。二本の縦木に等間隔に横木(棧)をとりつけたり、一本の棒に刻みを入れたりして「段」とし、壁などに立てかけて高所への昇り降りに使用する。縄や布などの柔らかい素材で作ったものは、吊るして使う。 一本梯子(丸木梯子)、二股梯子、縄梯子、猿梯子、折梯子、棒梯子、脚立 など。	ハシゴ			ハシゴ	ハシゴ		ハシゴ	ハシ	【梯子】 あしろ・あすろ・あんばし・さしばし・はし・ばし・はしのこ・ばしり・ばしる・はしんこ・ばつい・はつち・はつつい・はみのこ・はんのこ・ふあし 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【梯子】 あしろ・あまばし・ごすけ・さしばし・はし・ぼーしゅー 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 ぎやたつ 脚立	自立形の梯子。庭木の剪定や高所の修繕などの作業の際に、台として使用する。				キャタツ	キャタツ		キャタツ		【折畳式の踏み台・脚立】 きんま・くらかけ・きんぎょ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
しきもの敷物	下に敷いて使うもの。クッションや汚れ除け、装飾など目的はさまざま。 蓆座、蓆、蓆、蓆、蓆 など。	ゴザ				リュウキュウ、 ウ、シフガ、 ミ				【敷物】 えんざ(蓆製)・すがき(竹製)・わらだ(蓆製)・にくぶく(蓆製) 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 むしろ 蓆	植物で編んだ粗い敷物。さまざまな用途に利用。通常土間に敷かれる。	ムシロ			ムシロ、ミ シロ	ムシロ、ミ シロ		ムシト	ムシル	【蓆】 いなばき・いなばきみしろ・いなばきみしろ・いなまき・いのばきみしろ・いまなく・うらむしろ・かわむしろ・このはね・すと・むっしょ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一)	
 ねこむしろ 猫蓆	ネコ編みで作った蓆。堅固な編み方で厚みがあり、板の間で使用された。とくに開扉裏の周りは畳ではなく、これを敷いた。							ネコブク	ニクブク		
 こも 蓆	古い時代の敷物。蓆が登場してからは農作業の簡易な敷物となり、神事などに利用。	コモ			コモ			コモ			
 ござ 蓆座	植物で編んだ目の細かい敷物。 ござは通常イグサの茎を織にし、経に木綿糸を用いて織りあげた無地の敷物をいう。さまざまな用途に利用され、板の間に敷いたり畳の上敷としても使われる。 薄縁(うすべり)、花ござ などがある。	ゴザ			ゴザ	ウスベリ、 ゴザ		ゴザ	ムシル(ム ス)	【蓆座】 おすべらかし・てしま・とーしごた・ばだむす・まくり・めくり 【敷きござ】 はぐり 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【座・薄縁】 おしまき・ねござ・へつとり・へりとり・まくり・うしまち・しっこー 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 たたみ 畳	土台となる床の上に植物で編んだ目の細かい敷物(ござ)を張った厚手の敷物。 本来は座ったり寝たりする時に敷く座具で、はじまりは蓆を何枚か積み重ねたものだった。	タタミ			タタミ	タタミ、ヤ ロウタタミ		タタン	タタン	【畳】 あつじょー・あつどこ・あつべり・うえ・とこ・ひこ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【座】 あつじょー・あつどこ・あつべり・とこ・むしろ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 すのこ 簀子	竹や板などの素材を隙間を開けて並べ、横木に固定した敷物。 流し台としてたり、風呂場に置いたり、湿気を選けるために押入に敷いたり、水切りや通風の必要な場所に敷くことが多い。				スノコ	スノコ		ス			
 ふろしき 風呂敷	本来は、風呂場の床に敷いたり、着替えを持参したり、荷物の目印に使用した布。その後、運搬に欠かせない道具となり、現在でも多目的に使われている。	フロシキ			フロシキ		フロシキ	フロシツ			
 えんざ 円座	お尻の下に敷く円形の敷物。渦巻状に平らに編む。ワラウダ、ワロウダともいう。	エンザ					エンザ		インザ		
 ざぶとん 座布団	座るときに敷く綿入りの敷物。小布団。	ザブトン			ザブトン	ザブトン	ザブトン	ザブトン		【座布団】 いどりぶとん・こぶとん・さぶとん・しきね・しきぶとん・つまぶとん・ふとぎ 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【座布団】 ふとぎ・つまぶとん 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考	
寝具												
 ふとん 布団	就寝時に体の下に敷いたり、上に掛けたりする道具。 布を重ねて厚く縫い合わせたものや、袋状に縫って中に詰め物をしたものもある。古くは藁・糠殻・海藻などを敷いたり、板敷の上に藁や蓆を敷いて寝床とし、着ていた着物を上掛けにした。江戸時代に木綿が普及すると木綿の側に木綿綿を詰めた蒲団が登場し、着物形の上掛けにも綿を入れたものがつくられ、江戸時代末には四角い夜着が関西で使われ始めた。 敷き布団、掛け布団、かいまき布団、羽毛布団、シビ布団、真綿布団 など。	フトン			フトン	フトン	フトン	フトン	ウードク	【布団】うーず・うーど・うーどろ・うーどろー・うず・うずー・うど・うどろ・うんず・にじき・ねしき・ねじきい・ふとぎ・ふとげ・ふみしたぎ・ぼった(ぼろ布団) 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【蒲団】うーど・うず・うど・ふとぎ・ふみしたぎ・ぼた・うーどろ 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)		
 かいまき 搔卷	袖や襟のついた綿入れ着物の形をした掛け布団。夜着ともいう。	ヨギ			ヨギ		ヨギ、ヨブ、ヨギスマ		×	【夜具】やぶつ・よかぶり 【袖のある夜具・かいまき】ねまき 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)		
 ねまき 寝巻	寝間着とも書く。就寝時に身につける衣服。着した浴衣なども利用された。				ネマキ	ネマキ		ネマツ		【寝巻】かいまき・たんぜん・ねあわせ・ねいしょ・ねいぞ・ねーしょ・ねき・ねぎ・ねぎむの・ねぎもの・ねぎよき・ねぎりもん・ねば・ねもくい・ねよぎ・ねんねば・ねんねんぎ・ゆるち・よぎ 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【寝衣】ねもくい・ねんねば・よかぶり・かいまき・ねいしょ 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)		
まくら 枕	就寝時に頭を支えるため下に敷く台。 近代までは木の箱を台として、その上に小さくくり枕をのせた箱枕が一般に用いられた。 箱枕、船底枕、陶枕 など。					マクラ、タマクラ、マクラ、キマクラ	マクラ	マクラ	マッコク	【枕】あてがい・くるぼつひー・ごき・ちゃまくら・といやまくら・とてあな・ふせまくら・ぼーすまくら・まつくわばく 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一)		
 はこまくら 箱枕	就寝時に頭を支えるため下に敷く台。 木枕の一種で、箱型に作られた。下が扇状に広がった奥行の狭い台形で、その上に小枕という括弧を和紙に包んで取りつける。結った髪形が崩れないように女性が多く使用した。 船底枕 など。	ハコマクラ、ラ、フナコ、コマクラ		ハコマクラ	マクラ	ハコマクラ	ハコマクラ、ラ、キマクラ	ハコマクラ				
水まわりの道具												
 いどぐるま 井戸車	水汲み桶(釣瓶)を上げ下ろしするための滑車。 井戸の上方に組んだ屋形に取り付け、二つの桶をつないだ綱を通す。これで上げ下げが軽くなる。志野焼のものもある。						イドグルマ	カッシャ	イドグルマ、ツリン	ヤマ	【井戸】いがわ・いけ・いご・いずみ・いつい・いどかわ・いんご・いんとー・かー・かわ・くみかわ・しみずがわ・ちりけー・つづいけ・つほかわ・つりがわ・つるい・つるいけ(つるい)・つるべ・どよ・ゆがわ・ゆつ・いけど・ゆいど 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)	
 つるべおけ 釣瓶桶	掘り井戸の水を汲み上げる装置(釣瓶)に用いる桶をいう。 縄や竹竿の先にとりつけられた。古代・中世は主として曲物製の桶が使われ、近世以降は短冊状に割った板を編んで押さえた結桶が主流になった。肉厚の杉板を鉄の箍で押さえたものが多い。				ツルベ	ツルベ	ツルベオケ、ツルベ	ツイベオケ	チー、ツリ		【釣瓶】うぶる・かばしー・くばしー・きす・くりまき・くるまき・しゃく・しり・しる・すいー・する・ちー・ちーうき・つい・とうい・つりー・つりり・つりりー・つりりー・つべ・つり・つりっけ・つりでうけ・つる・つるい・つるべたんご・ぶら・まきいど 【滑車を利用した釣瓶】くるま 【はねつるべ】つりおけ 以上、【標準語引き方言辞典】(佐藤亮一) 【釣瓶】かばしー・きし・くばずー・くりまき・くるまき・しー・しゃく・じゅきー・たんご・ちりー・つりー・つりりー・つふれ・つり・つるい・ぶら・つふれ 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)	
 ておしぼんぐ 手押しポンプ	井戸の水を汲み上げるのに用いる手押しの鋳物製ポンプ。 明治末より普及した。取っ手を上下させて地下水を吸い上げる。この動作を漕ぐといった。	ポンプ			テオスポンプ、カッキンポンプ	ポンプ		ポンプ				
 ふね 槽	水を溜めたり、水に浸して洗ったりするために使う、箱形もしくは舟形の器。	ミスブネ				フネ、ミスブネ		ミスブネ				
 ふるおけ 風呂桶	体を洗うための湯を張る桶もしくは釜。湯槽。 湯沸かし装置と一体になったものもある。一人もしくは複数人で浸かる。湯槽から湯を汲み出す小桶を指すこともある。 鉄砲風呂、五右衛門風呂、石風呂 など。	フロオケ				フロ、ヘンフロ	オケフロ	フロ		【風呂桶・浴槽】おせつしよ・おろけ・こが・ふるだる・ゆがま・ゆこが 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)		
 ちょうずばち 手水鉢	手を洗ったり口をすすぐための水を入れておく器。 柄杓を添え、これで水をすくい手を洗った。 石鉢、吊手水 など。	チョウスバチ			チョウスバチ		テアライバチ	イシバチ	水タンク、トウジ、イチタライ	【手水鉢】はんど・はんどばち 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)		
 せんめんき 洗面器	顔や手を洗うための湯や水を入れる器。 古くは素焼や陶製で、薄板を曲げてサクラの皮で綴じた曲物製など、小形の盥が用いられ、手盥・洗面盥などと呼ばれた。真鍮やホーロー製が出回ったのち、洗面器と呼ばれるようになった。 洗面器、手盥、洗面盥、手水盥 など。	センメンキ			カナダライ		テダライ、チョウダライ	ピンダレ	ピンダレ	【洗面器・手水盥】こがい・ちよーずだらい・ちよーだらい・びんだらい・ちよんだらい・てだらい 以上、【標準語引き分類方言辞典】(東條操編)		

住

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 ほうき 箒	掃き掃除に用いる道具。 植物や羽など適度なしなりを持つ材料を束ねて用いる。柄をつけたものも多い。 材料別に竹ぼうき、シュロぼうき、モロコシぼうきなど、用途別に座敷箒、手箒、庭箒、荒神箒などの種類がある。	ホウキ			ホーキ	ホオキ、ヌイゴボオキ、ウスバキホオキ、シヨロホオキ、キビホオキ、タケホオキ	ホウキ	ホリ、シュロボツ、ササボツ	ホーチ	【箒】 さむらい・たんば・とさかぼーき・なせ・なで・なでぼーき・なでぼーき・はーき・はーきん・はいき・ぼうき・はき・はばき・はばきん・ふっつい・ぼーき・ぼーぎ・ぼーし・ぼつひ・よせ以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【箒】 さむらい・なせ・なで・はき・よせ以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ざしきぼうき 座敷箒	箒のうち、おもに室内を掃くのに用いる。	ホウキ		ザシキボウキ	ザシキボウキ			ホリ	ホーチ		
 たけぼうき 竹箒	外庭や道などを掃くのに用いる箒。 モウソウチクなどの枝などを束ねて作った。				タケボウキ	クサボウキ（ミズドイ用）		タケホリ	ヤンメーボーチ	【竹の枝で作った箒】 おろぼーき・がらがらぼーき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【竹箒】 あらよせ・おろとぼーき・おろぼーき・からぼーき・くわぼーき・こわぼーき・ささぼーき 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 くまで 熊手	落ち葉などをかき集めるのに使う道具。先端を曲げた割竹を放射状に並べ、柄をつけた形状。			クマデ、マンガア、コマンザリヤ	クマデ	コマデ、コマザライ	クサカツ			【落ち葉などをかき集める熊手】 くまざらい・くまざれ・くまだらい・くまんざらい・こまかき・こまざま・こまさら・こまさら・こまざらい・こまざらいかき・こまさらえ・こまざらえ・こまざり・こまざれ・こまじやら・こまだらい・こまでざらい・こまんざらい・こまんざらい・こまんざれ・こもざらい・まつごくざらい・まつばかき・まつばこざき・もばかき 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一）	
 ちりとり 塵取	箒で掃き寄せたごみを取り集め、運ぶ道具。箕に持ち手をつけたような形のものが多い。	チリトリ				ゴミトリ		チリトリ		【塵取】 えびぞーけ・えぼ・かたくち・かなみ・ごせとり・ごみとりみ・さきなし・さくなし・せみ・たかみ・たるみ・ちーとーぞーき・ちみとり・ちりぞーけ・ちりとりき・ちりとりぞーき・ちりとりぞーけ・つちみ・てだかみ・み・みかい・みみぞーけ・めつきや 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【ごみとり・塵取】 いしみ・いたみ・いぼ・えびぞーけ・えぼ・かたくち・ごみとりみ・さきなし・ずんどり・ちちみ・ちみとり・ちりかき・てぞーけ・てだかみ・ぼーき・ほげ・じょれん 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 くずいれ 屑入	一時的に紙くずなどのごみを入れておく器。 屑かごともいう。						クズイレ			【紙屑籠】 ぼーくかご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
その他											
 むしかご 虫籠	虫を飼育する籠。竹製の籠が多い。						ムシカゴ、ホタルカゴ				
 とりかご 鳥籠	小鳥を飼う籠。主にウグイス・メジロなど。篠竹や真竹を用いた。							メジロカゴ		【鳥籠】 くー・さしこ・さしご・さしごち・さしご・すずめかご・たる・ちむてい・る・びゅうむでいる・めご 以上、『標準語引き方言辞典』（佐藤亮一） 【小鳥籠】 ごぼん・さしこ・とりめご 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）	
 ねこつぐら 猫つぐら	猫の寝床。藁などで編み、囲炉裏のわきなどにこいた。	ネコテグラ				ネコイズミ			X		
 きんぎょばち 金魚鉢	金魚を飼ってながめるための鉢。主にガラス製や陶器製。										
 かき 花器	花をいける器。素材も形もさまざま。										
 けんざん 剣山	植物を刺して立たせるための台。平たい容器に花を活けるため考案された。台座にびっしり針を植えたものや、陶器や石などに多くの差し込み穴を開けたものなどがある。										
 せんていばさみ 剪定鋏	灌木・果樹・盆栽などの剪定に用いる鋏。主に洋鋏形で、2本の刃をX字に交差させ、ピンあるいはボルトで接合した。			ハサミ			テバサミ	センティバサン			

住

